

# Funehiki High School News vol.110

## ◆夏の締めくくりに

8月21日に行われたふねひき夏まつりのステージイベントに、今年も本校のよさこい部が参加しました。強い日差しが照りつける中、部員たちは高校生らしく元気いっぱいの演舞を披露しました（写真左）。

同日の夕方に行われた灯籠流しには、本校の美術部が約1カ月かけて制作した灯籠を出品し、福島民友新聞社賞を受賞しました（写真右）。今年の灯籠のモチーフは、子どもたちに人気のゲーム「スプラトゥーン」のイカの形をしたキャラクターでした。



## ◆船高生の努力と熱い思い

**【検定試験頑張っています】** 本校では資格や検定の取得を奨励しており、生徒たちは試験対策に熱心に取り組んでいます。日々の努力が実り、今年度も各種検定試験でたくさんの生徒が合格しました。その一部を紹介します。●日本漢字能力検定2級…2人 ●ニュース時事能力検定3級…12人 ●情報処理技能検定1級表計算…16人 ●文書デザイン検定1級…13人

**【私たちの思い】** 大震災から5年半の月日が流れ、私たちの故郷ふくしまが復興の道を進む中、本校生の故郷への思いは様々な形で社会に伝わっています。復興庁が企画・募集した「新しい東北」作文コンテストに本校3年生17人が応募し、そのうち6人が入選しました。どの作品にも、生徒たちの地域に対する思いがあふれています。入選作品は本校ホームページ校長ブログ（8/1付け）からご覧いただけます。また、9月3日に群馬県で行われた「全国高等学校決勝弁論大会」に3年生の渡辺希和さん（都路中出身）が参加し、多くの観衆が見守る中で「震災の経験から得た強さ、自分の思いを言葉で伝えることの大切さ」を精一杯述べました。

## ◆同窓会総会

8月15日、ウエディングプラザ丸美で同窓会総会・同期会が開かれ、同窓会役員をはじめ50人を超える同窓生が出席しました。総会の後の懇親会では、恩師や旧友との久しぶりの再会に話が弾みました。最後は出席者全員で校歌を斉唱し、思い出に残る同窓会となりました。



## ◆一日道路パトロール員に

「道の日」の8月10日、本校から3年生の2人の生徒が「一日道路パトロール員」として、県が管理する道路のパトロールを体験しました。パトロール員の方と一緒に市周辺の道路を見回り、壊れた道路の補修作業や道路脇の小枝を刈り取る作業などを行いました。参加した吉田公幸さん（船引中出身、写真右）と渡邊啓太さん（同、写真左）は「安全な道路を維持するために様々な作業が必要であることが分かりました」と、道路の管理について理解を深めていました。



## ◆鵬翼祭のご案内

今年は3年に一度の文化祭となる鵬翼祭が開催されます。生徒たちは創意工夫を凝らし、クラスや学年が丸丸となって企画準備にあたっています。本校の素晴らしい雰囲気、生徒たちの若さあふれるパワーをぜひ感じ取ってください。地域の皆様のお越しを心よりお待ちしております。

●一般公開 11月6日（日） 午前10時～午後2時



福島県立船引高等学校 Tel…0247-82-1511 Fax…0247-82-5233  
HP…<http://www.funehiki-h.fks.ed.jp> mail…[school@funehiki-h.fks.ed.jp](mailto:school@funehiki-h.fks.ed.jp)



## ジャンケンの力

Caleb Anderson

ケイラブ・アンダーソンさん  
（アメリカ合衆国  
ペンシルベニア州出身）

海	を	越	え	て
英	語			
	指	導	助	手
ペ	ン	リ	レ	ー
			No.	40

僕は日本に来てからまだ半年も過ぎていませんが、ジャンケンの力には驚きを増すばかりです。アメリカにもジャンケンに似たゲーム、「ロック（石）・ペーパー（紙）・シザーズ（はさみ）」がありますが、日本のジャンケンと比べると、それほどの習慣性はありません。アメリカのロック・ペーパー・シザーズは単なるゲームの1つです。楽しみのためにする子どももいれば、残った最後のクッキーを食べるのは誰かとか、皿を洗う順番をどうするかなどの小さな問題を解決するために、することもあります。また、アメリカには問題を解決する公平な方法として、コインを投げてその裏表で決めることがあります。

でも、日本のジャンケンには、もっと強い意味や拘束力があるのではないのでしょうか。小さな口論から大切な物事まで、そして何か問題が起きた時も、子どもから大人まであらゆる年齢層の人々が、典型的な問題解決法としてよくジャンケンを用いているように見えます。何らかのゲームをしていて同点で終わったら、ジャンケンで勝敗を決めることもあるでしょう。子どもたちが土曜日の午後何をして遊ぶかを、ジャンケンで決めることもよくあるでしょう。ジャンケンは何かを決めるために最も公平な方法で、それを疑う人はいないようなのです。それは「ジャンケンの摂理」とさえ言えます。

日本の子どもたちがジャンケンをいつ覚えるのかはよく分かりませんが、小さな子どもがジャンケンで問題を解決しているのを見たことがあります。子どもたちが意識しているかどうかは別として、ジャンケンはこれから先も、仲間内での問題を解決する最も良い意思決定方法であり続けるのではないのでしょうか。

また、日本のジャンケンは、2人以上の人たちが何か問題を解決するためにも用いられます。実際にあった例を挙げましょう。ある時、私が英語を指導している小学校の3年生のクラスで、給食のパンが1つ残りました。クラスのほぼ全員が、パンを欲しいと言いました。そこで、パンを手に入れる生徒を決めるための最も公平な方法として、彼らはすぐにジャンケンを選んだのです。彼らは最後の1人を決めるために、何回もジャンケンを繰り返しました（僕は見ていて頭がとても混乱しましたが）。始めて数分で幸運な1人が決まり、ジャンケンの勝者がパンを手に入ると、敗者からの愚痴や不満もなく、彼は平穩にそのパンを食べることができました。その決着を問題にする生徒は1人もいなかったのです。「ジャンケンの摂理」で決まったことなので、大人の仲裁などは必要ないということなのでしょう。



こういったジャンケンの力を目の当たりにしていると、こんな空想をしてしまいます。世界中のあらゆる場所で、もしもジャンケンを採用すればどうなるだろうかと。

アメリカならば、アメリカンフットボールの試合で先攻のチームを決めたり、サッカーの試合で引き分けだった時の勝敗を決めたりするのに用いられるかもしれません。それらを決める時に起きるかもしれない揉め事を、ジャンケンは回避することができるのです。アメリカで隣人や友人がジャンケンで問題を解決し、その結果に対して不平を言ったりぼやいたりしない姿を想像してみてください。世界は大小のいさかいで満ちています。ジャンケンが創り上げる平和な世界を空想する僕の気持ちも、少しは分かってもらえるのではないのでしょうか。

残念ながら、世界はこの慣習を採用することはないでしょう。ある人は、ジャンケンは早く結果が出るだけで安易すぎる、あるいは日本人以外には完全に理解されないと言うかもしれません。でも僕には、ジャンケンは単に結果が出るだけのものではなく、そこには公平性や信頼感、さらには運命づけられた未来が示されているような気がするのです。